

2011-11-16.

拉致県民集会

「めぐみを返して」

横田さん夫妻 声振り絞る

「私たちはただ、子どもを返してほしただけなんです」。北朝鮮に拉致された横田めぐみさん(13)の救出に向け15日、新潟市中央区で開かれた「忘れぬ拉致 11・15県民集会」。めぐみさんとの再会を願う父滋さん(79)、母早紀江さん(75)が声を振り絞った。娘を腕の中に取り戻したいと懸命な訴えを続ける夫妻の姿に、会場を埋めた市民が拉致問題解決への思いを新たにしていた。

1977年11月15日に「寄居中学校(同区)から」の帰宅途中に拉致されためぐみさんを探し求めてきた早紀江さん(75)は「新潟の海でめぐみさんの名前を叫んで歩いた日から、一日一日が針のむしろのようだった」と振り返った。救出を目指した講演会が1200回を超えたことに触れ、「私たちは経験した苦しみ、悲しみを伝えることしかできない。元気がうちに、拉致された人たちが笑顔で帰ってくる姿を見たい」と訴えた。



拉致被害者の帰国を願い、歌に聴き入る(右から)横田めぐみさんの両親早紀江さんと滋さん、曾我ひとみさんら=15日、新潟市中央区

滋さんも「同胞を救うという世論がなければ、日本政府が北朝鮮と交渉するのは難しい。拉致問題に関心をもち、見守り続けてほしい」と、会場に協力を呼び掛けた。佐渡市の拉致被害者・曾我ひとみさん(52)は、再会を果たせずにいる母・ミヨシさん(80)の失踪当時(46)を「80歳になる母は自分でできないことが増えているだろう」と気

遣い、近くにいられないもどかしさを言葉にこぼした。集会の最後には、早紀江さんが作詞した「コスモスのように」を来場者全員で合唱。早紀江さんが、めぐみさんとのやりとりを慈しむようにつづ

った歌詞が会場に響いた。来場した新潟市中央区

の主婦、山崎信子さん(74)は「同じ親として、横田さんの話に胸が詰ま

った。34年という年月はあまりにも長すぎる」と語った。新発田市の主婦、

神田愛子さん(59)も「一刻も早く被害者を家族の元に返してあげたい。政

府にも被害者家族の声が届いてほしい」と力を込めた。